

中野 真樹 提出 学位申請論文（課程博士）

『近代における墨字国語・日本語教科書と点字国語教科書のかなづか
いの研究』 審査要旨

論文内容の要旨

本論文は、第1章および第1部・第2部・第3部の3部10章と資料編から成るものである。

第1章「本研究の目的と概要」では、1946年に内閣告示された「現代かなづかい」が改訂されて1986年に内閣告示された「現代仮名遣い」の問題点を指摘して改訂の必要性を説き、近代日本語教育で用いられた仮名遣いと、明治期以来の独自の仮名遣いを有する日本語点字とは、墨字文字・表記研究の面から着目されることは少ないが、近代における仮名遣い改訂史の研究において十分な解明がなされるべきであるとする。ともに従来、表音式仮名遣いの使用が指摘されるものの、実際の資料を用いて分析した実証的な表記研究はまだ行われておらず、研究の余地があると述べる。

第1部「近代墨字国語教科書のかなづかい」では、かなもじ論者で日本語6点点字考案者の石川倉次による口語文典『はなしことばのきそく』と、第1期国定国語教科書『尋常小学読本』における仮名遣いの実態を調査している。第2章「『尋常小学読本』のかなづかい」では、1900年（明治33）の「小学校令施行規則」により導入された「明治33年式棒引きかなづかい」が使用されている第1期国定国語教

科書である1904年から1909年まで使用された『尋常小学読本』の表記を調査して、和語がほぼ字音仮名遣いで統一してあるのに対して、字音語は「じゅーに」「ニンギョー」の如くウ列・オ列に長音符が使われる棒引き仮名遣いであり、エ列は「エ列+い」を用るという実態を解明している。第3章「石川倉次著『はなしことばのきそく』のかなづかい」では、口語文典『はなしことばのきそく』(1901)の仮名遣いを分析して、助詞「は」「へ」「を」は「わ」「え」「を」、四つ仮名は「じ」「ず」に統一、長音は字音語・和語ともに長音符でほぼ統一し、明治33年式棒引き仮名遣いよりも表音的な表記法で書かれていると述べる。

第2部「清国留学生を対象とした近代日本語教科書類のかなづかい」では、清国留学生を対象とした日本語教育教材のうち、松本亀次郎著の会話教科書および日本語教育用の文法書、清国留学生によって書かれた日本語教科書の仮名遣いを調査している。第4章「松本亀次郎『言文対照 漢訳日本文典』のかなづかい」では、宏文学院の日本語教師松本亀次郎の代表作である文典型日本語教材『言文対照 漢訳日本文典』(1904)を調査し、和語と字音語と外来語の表記に違いがあり、和語は歴史的仮名遣いに準じ、字音語は原則として長音符を使用した表音的な表記法を用いており、明治33年式棒引き仮名遣いと共通点の非常に多い特徴を有すると指摘する。第5章「松本亀次郎著『漢訳 日本語会話教科書』のかなづかい」では、学校教育で明治33年式棒引き仮名遣いから歴史的仮名遣いに戻った大正期に刊行された同じく松本亀次郎の『漢訳 日本語会話教科書』(1914)を調査し、和語

は歴史的仮名遣い、字音語は明治33年式棒引き仮名遣いを下敷きにした表音的ではあるが長音符を用いず、国語調査委員会答申による仮名遣いと共通する折衷的仮名遣いが採用されていると述べる。第6章「清国留学生による日本語教科書『日語新編』のかなづかい」では、学習者である清国留学生自身によって著された葉良・李賡相『日語新編』（1903）の仮名遣いを長音表記を中心に調査して、和語は歴史的仮名遣いで統一されているわけではなく、字音語に関してはエ列長音以外は「教場（キョージョー）」のように棒引き仮名遣い及びかなで長音を表す「教師（キョウシ）」のような表音的な仮名遣いが基本となっており、特定の語には歴史的仮名遣いが使用されていると述べる。

第3部「近代日本点字資料のかなづかい」では、日本語点字仮名遣い史の整理を行い、近代点字国語教科書と近代点字新聞の初期の仮名遣いを調査している。第7章「かなづかい改定論史研究における近代日本語点字かなづかいの位置づけ」では、6点点字1字がかな1字に対応する点字かな専用文による文字表記システムである現行の日本語点字表記が助詞「わ」「え」「を」を用い、ウ段・オ段長音に長音符を用いるなどの相違はあるが「現代かなづかい」との共通点が多いと指摘した上で、日本語点字の表記が歴史的仮名遣い（第1期）から始まって明治33年式棒引き仮名遣いと共通するものとなり（第2期）、墨字による教科書が歴史的仮名遣いに戻った後に独自の表音的仮名遣いへと変化して長音符を用いるなど表音性の著しい『点字規則』（1940）が現れるが（第3期）、1955年に発足した日本点字研究会の検討により「現代かなづかい」（1946）との共通性の認められる『点字文法』

(1959)、その改訂版である『点字文法（点字国語表記法）』（1968）、日本点字委員会へと発展して出版した『日本点字表記法（現代語編）』（1971）、『改訂日本点字表記法』（1980）、『日本点字表記法 1990年版』（1990）、現行の『日本点字表記法 2001年版』（2001）に至る（第4期）改訂の過程を整理した上で、具体的にそれらにおける擬音語・擬声語を除いた和語・字音語の仮名遣いを比較考察している。第8章「近代日本語点字教科書『点字 尋常小学国語読本』」では、第7章で点字表記法書の記述を中心に整理した点字表記史区分を実証的に検討するために、点字表記史区分第3期に相当して、墨字の第3期国定教科書（ハナ・ハト読本、1917～1932）との比較が可能な筑波大学附属図書館視覚特別支援学校資料室所蔵『点字 尋常小学国語読本』を調査して、墨字の教科書が歴史的仮名遣いで表記されているのに対して、助詞は「わ」「え」「を」、四つがなは歴史的仮名遣い、長音は和語も字音語も長音符を用いるが明治33年式棒引き仮名遣いとは相違する例もあることを指摘している。第9章「近代点字新聞『点字大阪毎日』のかなづかい—第1号から第25号までを対象として—」では、日本点字の普及に大きく寄与した点字新聞である筑波大学視覚特別支援学校資料室所蔵『点字大阪毎日』の1号から25号まで（1922）を資料として調査して、助詞「わ」「え」「を」、四つがなは歴史的仮名遣い、長音は長音符を用いるが明治33年式棒引き仮名遣いと完全には一致せず、また、「おもー」のように『点字 尋常小学読本』とも一致しない表記も認められることを指摘している。

第10章「おわりに」では、各章で分析した助詞「は」「へ」「を」、

四つがな、和語・字音語の長音表記を全体的に比較整理して、明治33年式棒引き仮名遣いは、近代日本語教育および近代点字国語教育の仮名遣いに影響を与え、学校教育で廃止され歴史的仮名遣いに戻った後も使用され続け、特に日本語点字に関しては現在もウ列とオ列に長音符による長音表記に棒引き仮名遣いが受けつがれていると述べる。

日本語文字表記システムには視読文字である墨字と触読文字である点字があり、それぞれ独立した表記史と表記法があり、現在の日本社会において、書字・読字生活はさまざまな多様性を含んでおり、「誰にとっても合理的な読みやすい文字・表記」は存在せず、日本語文字・表記研究はその多様性を前提として行われる必要があるとする。

巻末に資料編として、筑波大学附属視覚特別支援学校所蔵『点字尋常小学国語読本』2巻～12巻の写真と墨字翻字を収めている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語表記・仮名遣い史研究において、従来、表音式仮名遣いの使用が指摘されながら資料に基づく実証的分析がほとんど行われて来なかった近代日本語教科書と日本語点字資料における助詞・四つがな・長音表記を中心に分析して明治33年式棒引き仮名遣い及び日本語点字考案者石川倉次の仮名遣いとの関係を解明したものとして高く評価することができる。

第1章「本研究の目的と概要」は、墨字使用者の規範である「現代

仮名遣い」の問題点を指摘し、近代日本語の表記・仮名遣い史研究で欠落していた近代日本語教科書と近代日本語点字資料における実態調査の必要性を指摘している。ことに日本語表記の多様性を認識して、墨字資料による日本語研究のみならず、日本語点字の表記研究の意義を明らかにして、その解明のための資料発掘と研究方法を示したところに大きな意義を認めることができる。

第1部「近代墨字国語教科書のかなづかい」は3章から成り、第2章では明治33年式棒引き仮名遣いが使用されている第1期国定教科書である『尋常小学読本』の表記を調査して仮名遣いの実態を解明している。第3章ではかなもじ論者であり日本語点字考案者の石川倉次の口語文典『はなしことばのきそく』自体の仮名遣い使用の実態を分析したもので、石川倉次自身の仮名遣いが明治33年式棒引き仮名遣い以上に表音的である点を解明している。

第2部「清国留学生を対象とした近代日本語教科書類のかなづかい」は3章から成り、近代に清国からの留学生に対する日本語教育が行われた際の宏文学院、東亜高等予備学校などにおける代表的な日本語教師である松本亀次郎の著した文典型日本語教材である『言文対照 漢訳日本文典』を第4章で取り上げ、会話教科書である『漢訳 日本語会話教科書』を第5章で取り上げて表記の実態を調査して明治33年式棒引き仮名遣いとの共通点の多い特徴を指摘しており、学校教育で歴史的仮名遣いに戻った大正期に刊行された『漢訳 日本語会話教科書』においてなお明治33年式棒引き仮名遣いを下敷きにした表音式仮名遣いが使用されているとする指摘は高く評価できる。第6章では日本語

学習者の側の著作である葉良・李賡相『日語新編』においても表音的な仮名遣いが基本となっている実態を解明している。近代日本語教科書における長音符などの表音的仮名遣いの使用は従来、若干の言及があったにとどまるが、本研究では、個々の日本語教科書における実態を実証的に分析してその表音式仮名遣いにおける明治33年棒引き仮名遣いと具体的な一致状況について解明している。日本語教育史においてはこの時期の日本語教科書が多数知られており、今後の資料を追加した調査によって新たな表記の傾向が見出される余地はあるものの、歴史的仮名遣いではない仮名遣いを使用する資料ジャンルを解明した点は高く評価することができる。

第3部「近代日本点字資料のかなづかい」は3章から成り、日本語点字仮名遣い史の整理を行った上で、近代における点字資料を対象に長音表記を中心とした仮名遣いを実証的に解明している。第7章では、現行の日本語点字表記と現代かなづかいとの共通性を指摘した上で、日本語点字の表記が歴史的仮名遣いから始まって明治33年式棒引き仮名遣いと共通するに至り、墨字による教科書が歴史的仮名遣いに戻った後にも独自の表音的仮名遣いへと変化する日本語点字表記史の区分について、日本点字研究会、ついで日本点字委員会による検討、改訂の歴史を『点字規則』『点字文法』を始めとする点字表記法書の記述の変化を丹念に分析している。第8章では点字表記史第3期に相当する筑波大学附属図書館視覚特別支援学校資料室所蔵『点字 尋常小学国語読本』を調査して助詞は「わ」「え」「を」、四つがなは歴史的仮名遣い、長音は和語も字音語も長音符を用いるが明治33年式棒引き仮

名遣いとは相違する例もあることを指摘しており、墨字資料による表記・仮名遣い史研究に欠落していた資料の発掘と実態分析がなされており、次章とともに本論文最大の収穫であるといえる。第9章ではさらに日本点字の普及に大きく寄与した点字新聞である筑波大学視覚特別支援学校資料室所蔵『点字大阪毎日』の1号から25号までを資料として調査して、助詞「わ」「え」「を」、四つがなは歴史的仮名遣い、長音は長音符を用いるが明治33年式棒引き仮名遣いと完全には一致せず、前章で分析した『点字 尋常小学読本』とも一致しない表記も認められることを指摘している。『点字 大阪毎日』は1922年に創刊されて現在まで継続して発行されている膨大な分量の資料群である。本論文で調査対象としたのはほんの最初期の1号から25号に過ぎないともいえようが、点字表記史の第3期に相当する時期であり、もとより墨字資料のみによる従来の近代仮名遣い史の研究では完全に欠落していた部分であり、近代日本語点字の実態研究の端緒を開いた点が高く評価でき、かつ今後の発展がさらに望める分野である。

第10章では各章で分析した助詞「は」「へ」「を」、四つがな、和語・字音語の長音表記を全体的に比較整理して、明治33年式棒引き仮名遣いの近代日本語教育および近代点字国語教育の仮名遣いへの影響を指摘している。

全3部10章を以て構成された本論文に一貫する論者の姿勢は、日本語文字表記システムには視読文字である墨字と触読文字である点字があり、それぞれ独立した表記史と表記法があるという認識に基づく現代の日本社会における書字・読字生活の多様性に対する認識である。

ただし、文字体系の考察にあたっては文字学の理論をさらに参照し取り込む余地があり、課題として残るものの、本論文によって、墨字資料のみで構成されてきた表記・仮名遣い史の研究に多様な表記の存在が明らかにされており、高く評価することができる。

よって、本論文の提出者、中野真樹は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

平成26年2月15日

主査	國學院大學教授	諸 星 美智直	㊞
副査	國學院大學教授	カイザー・シュテファン	㊞
副査	國學院大學教授	久 野 マリ子	㊞